

ゲスト◎株式会社シームス代表取締役社長

漆畑直樹氏

●イグノーベル賞受賞

働くことが
社会貢献だと
思えるビジネスを
目指す

プロフィール◎うるしはた・なおき

1964年（昭和39年）静岡県生まれ。19歳で起業し、85年電文社取締役、94年ラポール代表取締役、2000年ピクセン代表取締役を経て、現在は株式会社シームス代表取締役社長。「香り」をテーマに、医療・環境・セキュリティなどの分野で研究開発を行っている。2011年、わさびのにおいで火災を知らせる臭気発生装置で、「人々を笑わせ、考えさせる研究」に贈られるイグノーベル化学賞を共同受賞した。

人の役に立つビジネスを

—— わさびのにおいで火災を知らせる臭気発生装置で、昨年イグノーベル賞を受賞されました。

わさびに意外性があったようなのですが、私たちからすると意外でもなんでもありません。人は刺激がないと起きま

せんから、わさびのつーんとくるにおいを使うというアイデアは比較的早くからありました。じつは私自身はイグノーベル賞というのは名前も知らなくて、「ノーベルってつくからすごいのかな」と思っていたら反響がすごかった（笑）。この商品を作ったのは、火災で亡くなっている半数が耳の聞こえにくい人だと教えられたのがきっかけです。聴覚障害者

向けの警報器はフラッシュやバイブレーターで知らせるものを中心ですが、寝ていて光や振動に気づかないことがある。その話を聞いたとき熱くなって、その場で開発しようと思いましたが、私たちがとしてはどれだけ社会貢献できるかなんです。もともとそれが起業の目的ですから。



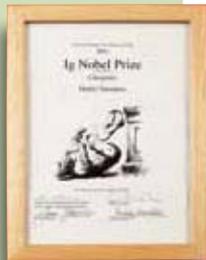
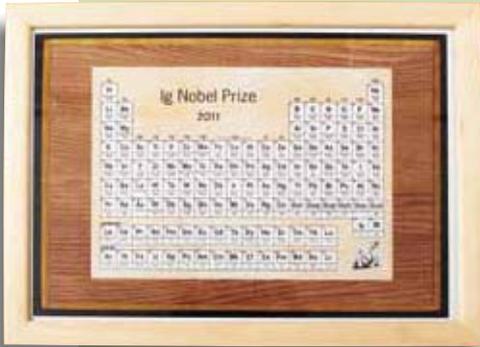
—— わずか19歳で起業されていますね。最初から起業家志望だったのですか？

私は5歳のころに成功確率50%といわれた心臓手術を受



わさびのにおいで火災を知らせる臭気発生装置

住宅用の火災警報器に臭気発生装置をつなげる仕組み。警報器が作動すると臭気ガスを噴射する。滋賀医科大学精神医学講座と共同で臨床試験を行ったところ、わさびの臭気ガスを吸引することで覚醒することを立証。特に耳の聞こえにくい方のほうが正常聴覚者より短時間で覚醒した。わさびに含まれるアリルイソチオシアネートには、痛みを感じる神経（三叉神経）を刺激する作用があるため覚醒を助ける効果がある。



イグノーベル賞の賞状と副賞

周期表をよく見ると否定を表す接頭辞「Ig(イグ)」の字が。ノーベル賞のパロディとして、1991年に創設され、世界中のさまざまな分野の研究の中から「人々を笑わせ、そして考えさせる業績」に対して贈られる。ノーベルに「Ig」をつけた造語で、「ignoble」(下等な、下品な)を掛けたジョーク。受賞者は、ハーバード大学サンダース・シアターで行われる授賞式で、聴衆を笑わせるユーモアあるスピーチをしなければならぬ。

姉の病気をきっかけに香りの世界へ

—— 香りをビジネスのテーマにされたのはなぜですか？
起業当初は発電機や省エネ関連機器の開発などをしていたのですが、10数年前に姉をがんで亡くしたことがきっかけです。姉の看病をしていたあるとき彼女を抱え上げたから、身体から新緑のにおいがしたんですね。がん患者に特有のにおいがあることは、医者の間ではよく知られた事実

でしたが、そもそも視覚や聴覚に比べ、嗅覚に関連する遺伝子は非常に複雑。調べたら研究もほとんど進んでいない状態でした。でも、もし香りのがんの早期発見ができれば姉も死なずにすんだかもしれない——そう思い、香りの研究をしようと決意しました。会社としてはがんのにおいの検知が大きな目標の一つですが、これまで携帯電話の着信を香りでも知らせる携帯ストラップや香りの出る絵本など、さまざまな商品を作ってきました。

—— 社会に貢献しながら利益もあげる。そのバランスは難しいそうですね。

難しいです(笑)。会社も小さいですから。ただ、皆さん思い出してほしいのですが、中学生のときに世の中の構造を習いますよね。企業は社会に支えられて利益を上げ、税金やより良い商品としてそれを還元する。でも今は自分たちさえ儲かれば良いという「金本位制」ばかりが強くなっているでしょう。僕は働いていることそのものが社会貢献だと感じられるビジネスをやりたいんです。格好つけてると言われたらそれまでですが、中学校の教科書に書いてあることを目指しているだけ。その思いは変わらないですね。

—— 最後にこれからの抱負をお聞かせください。

がんのにおいの検知では、まず乳がんを対象に研究を進めていて、すでに7つの香り成分は見つけました。将来は例えば検知キットを携帯電話に搭載して、簡単に体臭と呼吸で診断ができればと思っています。ほかにも香りをコアにしながらいろいろな研究開発を進めています。とにかく人の役に立つ製品をつくり、社会から必要とされる存在になることが目標です。また今後は、すでにスタートしている幹細胞を用いた再生医療支援事業にも注力をしていきますので、さらに多くの人の役に立てるよう引き続き努力していきたいと思っています。